滋賀県立大学
研究シーズ集

Research Seeds 2022

滋賀県立大学
The University of Shiga Prefecture

滋賀県立大学　研究シーズ集 2022 の発刊にあたり

「研究シーズ集 2022」をお届けします。

本学は「地域人材の育成や地域課題の解決に向けた取組、産学官連携を強化し、地域貢献のリーディングモデルとなること」を目標の一つに掲げています。この目標を達成するために、本学産学連携センターは、地域と大学を結ぶ窓口として、地域連携や産官学連携の推進のために活動しています。

この研究シーズ集は、教員の研究活動やその成果、研究者が持つ知識や技術をわかりやすく紹介し、地域や産業界の皆様に知っていただき、広く活用していただくことを目的として、2005年度から発刊しています。このたび、新たに内容を更新して「研究シーズ集 2022」（統合版）を作成しました。共同研究や受託研究、技術相談の「シーズ」としてご利用ください。

新型コロナウイルス感染症流行の終息はまだまだ先のようで、研究活動もなかなか全開というわけにはいかないようです。このような時期にこそ、地域や産業界の皆様と一緒に、それぞれのシーズを大事にあたためて育てて行けたら、と考えております。本シーズ集が、イノベーションの創出や地域社会の発展に少しでも貢献できれば幸いです。

なお、このシーズ集は当センターのホームページにも掲載いたします。本学の研究シーズに興味を持っていただいた皆様には、お気軽に当センターまでご連絡いただきご相談くださいますよう、お願いいたします。

2022年 9月

公立大学法人滋賀県立大学
産学連携センター長　安原　治

〈研究シーズ〉　目次

学部学科等		職名	氏名	タイトル	ページ
人間看護学部	人間看護学科	教授	伊丹　君和	看護・介護者の腰痛予防教育システムの開発および地域住民の健康生活支援	113
		教授	越山　雅文	超音波を使ったヒト下肢浮腫定量測定装置の開発	114
		教授	坪井　宏仁	健康寿命延伸における、こころとからだのWell-being実現	115
		准教授	米田　照美	看護者の危険認知と医療安全教育 ～すべての人々に安全な医療・看護の提供を目指して～	116
		講師	関　　恵子	触れるケアの定量化、手技教育支援システムの開発 および腰痛のある看護職者の就業支援	117
		講師	千田　美紀子	看護従事者育成に関する研究	118
		教授	古株　ひろみ	子どもの気持ちに寄り添う	119
		准教授	川端　智子	小・中学生を対象とした喫煙および受動喫煙防止教育	120
		講師	玉川　あゆみ	自閉スペクトラム症児の耳鼻咽喉科診療を円滑に 進めるためのケアガイドの開発	121
		講師	渡邊　友美子	産後の母子への支援に関する研究	122
		教授	岡本　紀子	地域在住高齢者の肺炎予防	123
		教授	横井　和美	ホリスティックケアにおける音楽療法と看護の協働	124
		准教授	荒川　千登世	続発性リンパ浮腫のセルフケア継続支援	125
		講師	岡﨑　瑞生	健康寿命の延伸に向けた研究への取り組み	126
		講師	片山　将宏	脳卒中サバイバーのセルフマネジメントプログラム開発	127
		講師	松井　宏樹	フレイル状態にある高齢者への意思決定支援	128
		教授	甘佐　京子	小・中学生を対象にしたメンタルヘルス教育の検討 （教職員・保護者も含む）	129
		教授	新井　香奈子	地域包括ケアの時代における地域・在宅看護の専門性	130
		教授	牧野　耕次	対人援助関係におけるインボルブメント	131
		講師	川口　恭子	ひきこもり状態にある人と家族への支援	132
		講師	國丸　周平	がん患者への意思決定支援	133
全学共通教育推進機構		准教授	坂本　輝世	対話としての英語表現力の育成ー言語使用者としての発達を目指してー	134
		講師	サンフォ ジャンバティスト	Factors of Rural-Urban Learning Achievement Inequalities in Francophone Sub-Saharan African Primary Education.	135
		講師	近藤　佑樹	2010年代以降の自伝的アメリカ文学作品における対テロ戦争と身体性の 文化史的研究	136
地域共生センター		教授	鵜飼　修	地域特性を活かした「地域ビジョン」の創造支援 ～地域診断法及び総合的な学習の時間における展開～	137
		講師	上田　洋平	「あたりまえのくらし」と「無事の文化」を守る 　まちづくり手法の開発・地域づくり人材の育成	138
地域ひと・モノ・未来情報研究センター		准教授	杉山　裕介	物理現象を記述する偏微分方程式の数学解析	139

＜研究者別　研究分野・キーワード一覧＞　140-143

看護・介護者の腰痛予防教育システムの開発
および地域住民の健康生活支援

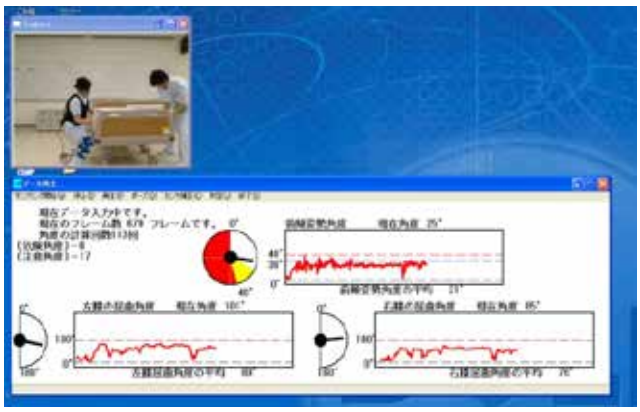
関連するSDGsの国際目標

人間看護学部　人間看護学科　　教授　　伊丹　君和
研究分野　：基礎看護技術、教育工学
研究室ＨＰ：　http://www.nurse.usp.ac.jp/kiso/

①看護者および介護者の職業性腰痛は深刻であり、離職者防止の観点からも腰痛対策は急務である。看護動作における腰痛発症の要因として上体を前屈させる前傾姿勢やひねり動作などがあげられるが、まず自己の看護動作時における危険姿勢を自覚することが、改善への糸口と考えている。そこで、動作時の前傾姿勢角度を自己チェックし、腰部負担計測が可能な機器開発を本学工学部および（株）村田製作所などと進め、現在は青山学院大学理工学部などと腰痛予防教育管理システムの開発に取り組んでいる。本システムの開発・普及によって、さまざまな職種の腰痛予防対策に貢献することが期待される。
②地域住民の健康教育および健康生活支援を目的に、近江楽座のプロジェクトチーム『未来看護塾』の活動を支援している。

■腰部負担域を「音」でリアルタイム体感可能な機能搭載

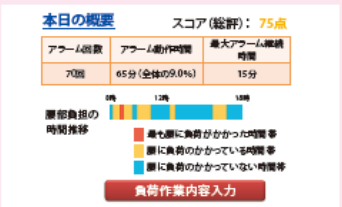
看護動作時に腰部にかかる関節モーメントの算出などから危険角度を40°、注意角度を30°と定めた。また、視覚だけでなく聴覚からもリアルタイムに自己のボディメカニクス活用状況を認知させることが効果的と考え、危険角度および注意角度における音発生機能を搭載した。すなわち、動作時にリアルタイムで自己の前傾角度の度合いを認識できるように、前傾角度に応じてコンピュータ内蔵スピーカーから２種類の警告音を出力する仕組みである。前傾角度が注意角度30°を超えたときに807Hz、前傾角度が危険角度40°を超えたときにはより高音である2250Hzの警告音を発生させる。**＊工学部との共同開発**



機能①
腰部負担発生時のお知らせ機能

●腰部負担が大きくなった場合、アラームで装着者に注意喚起を行います。
●また、簡単操作で、一時的にアラーム機能をOFFにすることもできます。

機能②
腰部負担に関する各種結果表示



●本器には、勤務時間中の腰部負担を毎秒毎に記憶する機能があります。
●それらデータを処理して、業務改善に役立つ各種の結果表示が行えます。

■携帯型　腰部負担計測器

看護・介護者の職業性腰痛の改善に役立てるために開発した。看護業務時に本機器を胸ポケットに装着することで、業務中の腰部負担の計測・数値化が可能となる。また、同時に警告することも可能である。

＊（株）村田製作所との共同開発

■地域住民の健康生活支援

地域住民の健康教育および健康生活支援のため、滋賀県が推進する「健康しが」と協賛し活動するとともに、「未来看護塾」の学生とともに地域各地で健康教育および健康支援活動を行っている。

「未来看護塾」の紹介動画→

＜特許・共同研究等の状況＞
①本学工学部安田寿彦教授、西岡靖貴講師ら、（株）村田製作所、彦根市立病院との共同研究（特許：腰部疲労判定方法、ソフトウエアおよび腰部疲労判定装置　特願　2016-11857など）現在、青山学院大学と共同研究

超音波を使ったヒト下肢浮腫定量測定装置の開発

関連するSDGsの国際目標

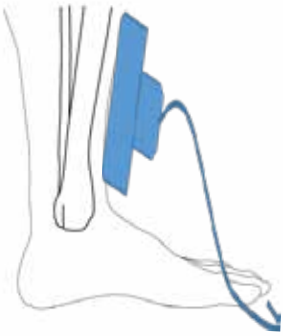
人間看護学部　人間看護学科　　教授　　越山　雅文
研究分野　：浮腫診断・治療、子宮頸がんの診断・予防

浮腫は生理的にも病的にも生じる。臨床現場では、浮腫程度を診断するのに指で下肢を押して圧痕を観察する手法がとられている。当研究室では、医療現場で簡易に使用できる超音波浮腫定量装置の開発を研究している。

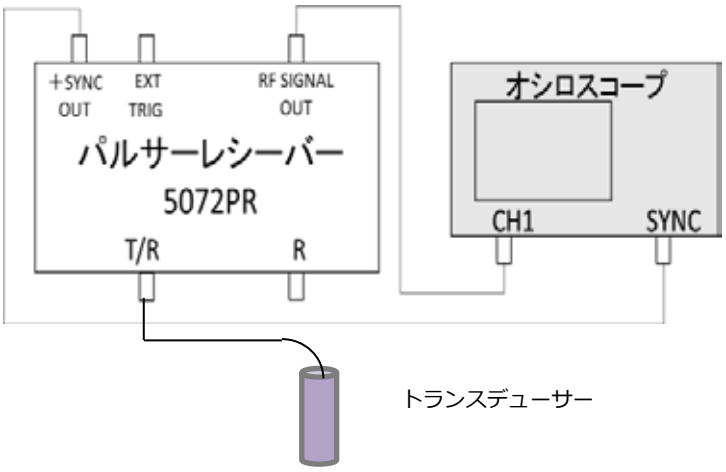
■超音波画像診断装置を使ったヒト下肢浮腫の測定

妊娠後期の妊婦では、生理的にも病的にも浮腫をきたす場合が多い。我々は、携帯型超音波画像診断装置を使って妊娠中期から後期にかけて下肢浮腫をきたした妊婦ときたさなかった妊婦の２群で、それぞれの下肢皮膚厚（表皮～皮下組織）を測定した（右図）。全98足の測定結果では、浮腫群の皮膚厚は6.4±0.3mmであったのに対し、非浮腫群では4.6±0.4mm（p=0.0001）と有意な差が得られた。カットオフ値は4.7mmと計算できたが、感度が83.9%、特異度が66.7%、正確度が77.6%に留まった。浮腫が無くても、元々脂肪の多い肥満群では皮膚厚が大きく算出される傾向にあった。この皮膚厚測定は、浮腫ありと分かっているヒトの治療効果判定には有用だが、初回の浮腫診断では若干の問題点を含むと考えられた。

■組織内超音波通過速度測定による水分量算出



肥満の有無に関わらず、一回の測定で皮膚組織の水分量を正確に測定できる装置の開発が必要と考えた。現在は、工学部との共同研究にて、下図に示すようなパルサーレシーバー、オシロスコープ、トランスデューサーを連結させた装置にて皮膚組織内の超音波通過速度を測定し、得られた数値から含有水分量を算出する研究を行っている。一度の操作で、定性と定量を同時に測定できる機器開発を目指している。



健康寿命延伸における、こころとからだのWell-being実現

関連するSDGsの国際目標

人間看護学部　人間看護学科　　教授　　坪井　宏仁

研究分野：　心身医学、精神神経免疫学、国際保健

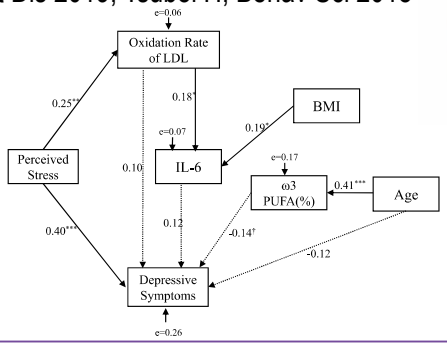
研究室HP：　https://researchmap.jp/pohjolainen/

心−身の関連性は、科学的エビデンスが証明されてきています、抑うつ予防･幸福感の向上を、社会と末梢の抗酸化･抗炎症的側面から追求することを目標とします。

抑うつと慢性炎症

指標 TNFα, IL-6, IL-17, IL-10, NF-κB他, 各種SNPs

Tsuboi H, J Affect Dis 2019, Tsuboi H, Behav Sci 2018

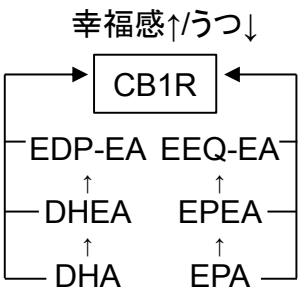


栄養素の精神神経作用

内因性カンナビノイド

Tsuboi H, Nutrients 2020

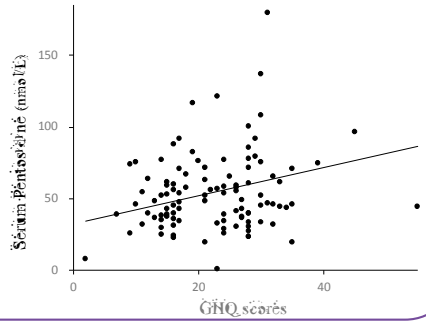
CB1R: cannabinoid receptor type 1
DHEA: docosahexaenoyl ethanolamine
EDP-EA: epoxydocosapentaenoic acid-ethanolamide
EPEA: docosapentaenoyl ethanolamide
EEQ-EA: epoxydocosatetraenoic acid-ethanolamide



精神的健康度と糖化

AGEs（Pentosidineなど）

Tsuboi H, J Psychosom Res 2019



抑うつ評価

質問票CESD-R日本語版の作成

(CESD-R: the Center for Epidemiologic Studies Depression Scale – Revised)

Tsuboi H, Behav Sci 2021

人間看護学部

看護者の危険認知と医療安全教育
～すべての人々に安全な医療・看護の提供を目指して～

関連するSDGsの国際目標

人間看護学部　人間看護学科　　准教授　　米田　照美
研究分野　：医療安全　看護管理学　基礎看護学
研究室ＨＰ：http://www.nurse.usp.ac.jp/kiso/

人々が病や障害から健康を回復するため、看護者（医療者）として安全な医療・看護を提供することは最低限の責務です。そのためには、看護者が療養環境のリスクを認知する観察眼を持つことが求められます。看護者の観察眼を解明し、看護教育において優れた危険認知力をもつ看護者の育成に貢献したいと考えています。

１．看護者の危険認知に関する観察眼の解明

医療事故を未然に防ぐためには、看護者が素早く危険を認知する技能が重要です。下記の眼球運動測定機器を用いて、看護師の優れた危険認知の特徴を学生との比較によって明らかにする研究を行っています。観察場面として「高齢者の車椅子やポータブルトイレへの移乗」「歩行」「小児患者のベッド周辺環境」など療養環境の場面を取り上げて看護者の注視や視線の軌跡を計測しています。

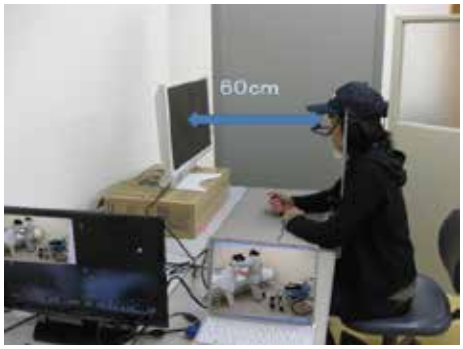


図１．眼球運動計測の状況

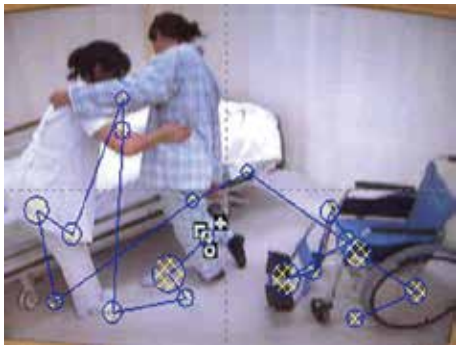


図２．車椅子移乗観察時の視線分析

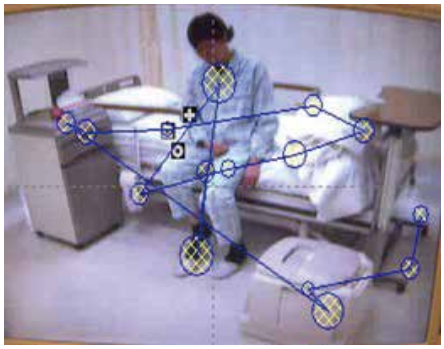


図３．ベッドサイド観察時の視線分析

（写真の〇は注視時間の長さ、線は注視の軌跡を表す）

２．医療事故模擬体験演習の開発・実施・評価

看護学生を対象に医療事故に関わる危険認知の向上を目指した医療事故模擬体験やシミュレーション教育を実施し、その学習効果を検証しています。医療事故をよりリアルに再現するために模擬患者役はスタントマンが演じています。

図４．医療事故再現劇の様子

図５．グループで車椅子移乗体験

図６．車椅子移乗体験の様子

触れるケアの定量化、手技教育支援システムの開発および腰痛のある看護職者の就業支援

関連するSDGsの国際目標

人間看護学部　人間看護学科　　講師　　関　恵子
研究分野　：基礎看護技術、医療福祉工学
研究室ＨＰ：http://www.nurse.usp.ac.jp/kiso/

①触れるケア“マッサージ教育”として、大学の基礎看護技術学やホリスティックケア論でマッサージ教育を行っています。そして、地域の住民の方々や病院で活動を行う、看護ボランティア“未来看護塾”で看護学生が実施するハンドマッサージの実技指導を担当しています。

②看護学生および視覚障害のあるあん摩マッサージ指圧師養成学校の学生や有資格者を対象とした手技教育支援システムを工学部と医療教育システム開発企業と共同制作を行っています。

③看護師の腰痛者経験者は非常に多く、腰痛により仕事だけでなく私生活にも影響を及ぼします。看護職者が、仕事でも私生活でもいきいきと過ごせる体づくりを行うための研究を彦根市内の病院の協力を受け、腰痛緩和ケアに関する就業支援に向けた介入研究を実施しています。

■看護教育におけるマッサージ手技学習システムの開発

あん摩マッサージ指圧師の資格を生かし、看護教育・地域健康支援で看護マッサージを行っています。マッサージは、受ける側の心地よさだけでなく、心身への効果を見える化し、マッサージの心地よさを定量化することが安全で安楽な看護実践を行う上で重要です。そのため、学習システム開発を本学の工学部機械システム科の西岡講師と行っています。

■腰痛のある看護職者の就業支援に関する研究

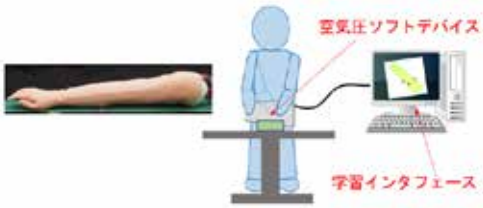
看護師の看護援助を行う上で、腰に負担のある患者の持ち上げ動作をなくす取り組みは積極的に行われています。しかし、寝たきり患者さんの看護の場合、清拭や排泄、食事の援助で中腰姿勢といった腰痛の原因となる動作が多く存在します。

研究では、腰痛原因動作による腰の負担“筋肉の疲労”を改善するための血行促進作用のあるマッサージによる就業支援研究を実施しています。

■視覚障害者を対象とした手技教育支援システムの開発

視覚障害のある人々の主要な職業としてあん摩マッサージ指圧師業があります。しかし、所得は同じ資格を持つ晴眼者の半分以下であり、職業的地位も低いことが問題となっています。その原因として、視覚データが得られない状況での手技習得の難しさが挙げられます。

現在、手技教育支援システムを、本学の工学部機械システム科の西岡講師と共同開発しています。この開発では、県内の視覚障害者センター、県立盲学校、医療教育システム開発企業と連携し取り組んでいます。



看護従事者育成に関する研究

関連するSDGsの国際目標

人間看護学部　人間看護学科　　講師　　千田　美紀子
研究分野　：基礎看護学　看護教育

近年、高齢社会になっていく社会の中で医療に対する安全・安心の意識は高まっており、質の高い医療ケアの提供が求められています。ケアを受ける中でも、その人らしい生活が送れるように支援することが看護職者に求められており、看護学教育にとって重要になると考えます。その実践能力が育つように、看護技術に関する教育方法の検討や、学生一人一人の個別性に沿った支援に関する研究を行っています。

■看護ケアの技術習得するための教育方法の検討

・看護学教育の中で、看護ケアの技術習得は必要不可欠なものです。看護ケア技術には、食べる、寝る、動く、息をする、身なりを整える、身体を清潔に保つなど、生きていくために必要な動作の援助があります。それらの技術が実践できるようになるには、知識・技術・態度を身につける必要があります。現在の教育では、まず技術に必要な知識を「講義」で学び、技術・態度は、学校内で学生同士で実践し合う「演習」を行い、「実習」を通して病院などの現場で実践することで習得しています。

その教育の中でも「演習」に着目し、技術を習得するためにはどのようなことが影響するのか、効果的に学ぶための方法を検討しています。また、技術教育の中で腰痛予防に関する検証も行っています。

■発達障害の特性をもつ学生への支援

・近年、「発達障害」という言葉を耳にすることが増えたと思います。発達障害とは、生まれつき脳の発達がアンバランスであり、ある特定分野の勉学が苦手、コミュニケーションが苦手、こだわりが強い、落ち着きがない、集中力が続かないなど、様々な特徴により日々の生活に困難を抱えている状態のことを指します。現在はそのような人が増加傾向にあり、学びやすい学習環境や働きやすい労働環境を作ることが求められています。その中でも特に看護では相手の気持ちに寄り添うことが大切であり。職業選択をする上でコミュニケーション能力が必要とされます。コミュニケーション技術も学習により、身につけていくことが可能であるため、この特性個々に沿った支援を行うことで、困難が少しでも軽減できるような研究を行っています。

＜研究ノート＞

・**「看護教育における病院実習に関する研究の動向分析と今後の課題」**千田美紀子，米田照美，清水房枝，伊丹君和（人間看護学研究　(11)　45 ～ 52　2013年03月）共著　共同（主担当）

子どもの気持ちに寄り添う

関連するSDGsの国際目標

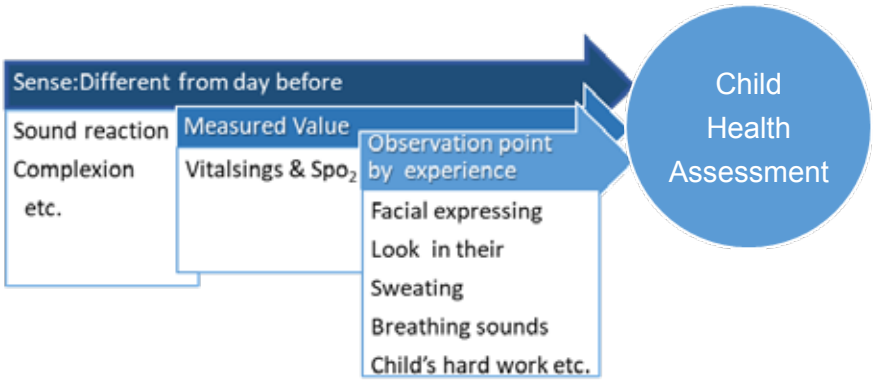
人間看護学部　人間看護学科　　教授　　古株　ひろみ
研究分野　：小児看護、家族看護

子どもは、ことばでは十分に自分の気持ちや状況を表現することができません。
そのため、子どもの気持ちや体調に寄り沿った支援や技術が必要と考えています。

■子どもの健康評価の共有化に関する研究

医療者の健康評価に至るプロセスについては経験や体験から感じとるいつもとの違いがまず最初に察知されます。その後、客観的な数値で確認し、体調を維持するための対応が行われます。

誰もが共有できる健康評価指標の開発にむけて、経験や体験から感じ取る視点などについて体系的に可視化することを研究しています。



The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars

■処置や入院などで生ずる子どもの心理的不安の軽減にむけた支援への研究

処置や入院などで生ずる子どもの心理的不安の軽減のための支援について研究しています。
また、その内容を小児看護教育においても教授し、実践に臨めるよう検討しています。

＜論文＞
•**Awareness of Clinical Instructors Regarding Advocating for Children's Rights in Pediatric Nursing Training**
(The 24th East Asian Forum of Nursing Scholars 2021年04月)
Rumi Ueno, Hiroko Kokabu, Chiyuki Ryugo, Tomoko Kawabata, Miki Hirata, Misa Suzuki, Ayumi Tamagawa

■小児看護学におけるシミュレーション学習の研究

子どもの状態を観察し、正しい判断やケアを提供できるためには、シミュレーション学習が有効だと考えています。知識・技術に加え、チームワークやコミュニケーション力などの包括的な実践力の修得を目指し、効果的なシミュレーション学習についての研究も開始しています。

小・中学生を対象とした喫煙および受動喫煙防止教育

関連するSDGsの国際目標

人間看護学部　人間看護学科　　准教授　　川端　智子
研究分野　：小児看護学

概要：未成年の喫煙は法的に禁止されているというだけでなく、医学的・社会的に深刻な問題を引き起こします。未成年の喫煙行動は、友人、親、兄姉、教師などの喫煙と密接な関係があるという結果が示されています。そのため、未成年へのタバコに関する教育が必要であるとともに、子どものモデルとなる家族に対しても同様に教育することが必要不可欠です。今まで未成年に対する様々な防煙教育プログラムが実施されてきましたが、子どもが親の喫煙に対する態度や考え方に影響を受けるという点に着目したものはありません。喫煙および受動喫煙防止教育活動を通して、親子がタバコに関する正しい認識を持ち続けることを目指しています。

また、近年においては喫煙開始年齢の低年齢化が問題となっており、低年齢化に影響する要因解明も行っています。

■小中学生を対象とした喫煙および受動喫煙防止教育の実践

教育プログラムには、基本的な喫煙に関する知識を伝えるだけでなく、自分が喫煙するという行動に対してどのように向き合うか、誘われた時にどのように断るかについてなど、ロールプレイを用いて、自己効力感を高める教育を行っています。

また、喫煙だけでなく、受動喫煙からどのように身を守るのかという点も重要な教育です。自分の身を守るためにどのような行動をとる必要があるかについて考えられることを目標に教育しています。

■保護者への喫煙および受動喫煙防止教育の実践

保護者へは、参観を利用し学校と協働し教育を行っています。

■喫煙開始年齢の低年齢化の要因の解明

構造方程式モデリングの手法を用いて因果モデルを作成しています。喫煙開始年齢を低年齢化させないためには、喫煙に関する知識の増大だけでは不十分であり、親や社会が子どもの喫煙に注意を払い、子どもの喫煙に対して介入していくことが重要であることが解明されました。

自閉スペクトラム症児の耳鼻咽喉科診療を円滑に進めるためのケアガイドの開発

関連するSDGsの国際目標

人間看護学部　人間看護学科　　講師　　玉川　あゆみ
研究分野　：小児看護学、地域看護学、家族看護学

自閉スペクトラム障害をもつ子ども（以下、ASD児）は，医療受診に対する困難がある場合があります．特に感覚過敏がある場合，感覚器の診療を行う耳鼻咽喉科への受診では困難が大きいと言われています．そのため，ASD児の耳鼻咽喉科診療における問題と支援を明らかにし，診療を円滑に進めるためのケアガイドの開発を目指しています．

■自閉スペクトラム症児の耳鼻咽喉科診療における問題と支援の明確化

耳鼻咽喉科診療でASD児が抱える問題と支援について，ASD児の耳鼻咽喉科診療に携わっている医療関係者に面接調査を行いました．その結果，医療関係者は，ASD児と親が耳鼻咽喉科診療に対するネガティブな体験による心的負担を抱えていることを理解する必要性があることが明らかになりました．その上で，ASD児と親との関係性を積極的に築き，ASD児が主体的に診療に臨めるよう支援する必要性が示唆されました．

■自閉スペクトラム症児の耳鼻咽喉科診療を円滑に進めるためのケアガイドの作成

文献検討や面接調査結果を踏まえて，「耳鼻咽喉科受診が苦手な自閉スペクトラム症児の診療をスムーズに進めるためのケアガイド」を作成しました．ケアガイドは，第Ⅰ部：子どもの障害特性の理解，第Ⅱ部：子どもと親への基本的な関わり方，第Ⅲ部：診療の進め方で構成しました．今後は，臨床現場において医療関係者にケアガイドを実際に使用してもらい，臨床での適用可能性を評価していきます．また，ケアガイドの活用の幅を広げていくために，アプリ等のデジタルコンテンツの開発を目指しています．

項目	確認事項
気が紛れている間に処置をする	
● 動くと危ないことを再度説明し、診察中に気が紛れるようポジショニングを指示ながら声をかける。 ● 必要時、保護者の抱っこや、医療関係者による頭部の固定をおこなう。 <ポジショニングの例> ・右耳を診察時は「左手を高くあげて」と指示を出す（あるいは絵・写真カードを示す）。診察中は「手をあげてね」「天井にさわれるようにあげてね。もっともっとあがるかな？もうちょっと伸ばして伸ばして」等と声をかけて手をあげることに集中させる。 ・鼻や喉の診察時、またはスワブの検査の時は、「目はお空のほうをよく見て、手はパーにしてお空に向けて膝の上においてね」と指示を出す（あるいは絵・写真カードを示す）。「手は空向いてる？ちょっと気持ち悪いけど、お空向けててね」等と声をかけ、動作に集中してもらう。	Point ・子どもに触れるときは指先で触れず、手のひらを用いて面で触れる。 注意 ・不意に手が動きそうな時は「握手してようか」といって、手を握らせてもらう。力をいれず、痛みがないように握る。
● 集中できるものを見せる <具体例> ・画面モニターで耳の中を見てもらい、確認しながら進める ・子どもの興味のあるDVDやゲームを見せる ・小さめの玩具やキーホルダーをポケットに忍ばせておいて、タイミングを見て出すことで気を引く	Point ・動きがあるおもちゃによく集中することができる。
● 子どもが日常で大切にしているものを持参してもらい、それらを用いて気を紛らわせる <具体例> ・ぬいぐるみやタオル等　・iPad等	Point ・大切にしているぬいぐるみ等は、子どもの安心材料にもなる。

耳鼻咽喉科受診が苦手な自閉スペクトラム症児の診療をスムーズに進めるためのケアガイドの一例

産後の母子への支援に関する研究

関連するSDGsの国際目標

人間看護学部　人間看護学科　　講師　　渡邊　友美子
研究分野　：生涯発達看護学

概要：産後の女性と家族が、健康に子育てをすることができる、
全ての人が子どもを育てることが心から楽しいと思えるような社会を目指して、
できることから少しずつを目標に研究に取り組んでいます。

現在は、この課題に取り組んでいます

■マルトリートメント予防に向けた支援ガイドの開発

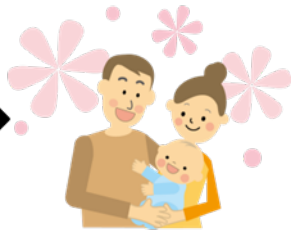
マルトリートメントは、子どもの発達・発育を阻害する要因となるばかりでなく，身体的健康被害、，心理的・社会的健康問題のリスクを上昇させます。また、被虐待児として育った親は、自分の子どもを虐待するという虐待の世代間連鎖を引き起こすとされていて、日本の母子保健上の最優先すべき社会問題です。マルトリートメント未然に防ぐ支援は、産後の母子が健やかに生活を送るために取り組む課題の1つと考えます。

産科医療機関での1か月健診時に実施するマルトリートメント予防のための看護職者用ガイドを作成

→

産科医療機関での1か月健診時に実施するマルトリートメント予防のための支援プログラムの実施と効果の検証に発展

→



マルトリートメントとは？

子どもを育てる養育者からの、「身体的虐待」「性的虐待」だけではなく「ネグレクト」「心理的虐待」を包括した内容で、子どもへの発達を阻害する行為全般を含めた「不適切な関わり」のことをいいます。

地域在住高齢者の肺炎予防

関連するSDGsの国際目標

人間看護学部　人間看護学科　　教授　　岡本　紀子
研究分野：高齢看護学、地域看護学

概要：
　肺炎は我が国の死因の第5位、誤嚥性肺炎は第7位で、合わせると第3位の多さとなります。そして、肺炎に罹患する方の多くは高齢者です。
　加齢とともに免疫機能や嚥下機能が低下し、肺炎に罹患しやすく治癒しにくくなります。しかし、日常生活に目を向けると、社会的な交流を図ることでよく眠れたり、夜間の睡眠の質を高めることで免疫機能への効果も期待されます。
　そこで、食べる、眠る、活動する（身体を動かしたり人と関わったりする）といった日常の営みや歯磨きなど、高齢者にとって無理のない肺炎予防のためのセルフケアを提案したいと考えています。

■加齢と睡眠の質

　加齢に伴い睡眠の質は低下します。具体的には、寝付くまでに時間がかかる、途中で目が覚める、朝早く目が覚める、ぐっすり眠った感じがしない、といったことが生じます。
　そこで、高齢者の方に右の図のように手首に機器を装着してもらい睡眠時間や活動量、照度などを測定して結果をフィードバックしています。

wGT3X-BT（ｱｸﾁｸﾞﾗﾌ社製，米国）

■日常の肺炎予防策

　肺炎を予防するために、手洗いやマスクの装着等が推奨されています。
　これらの実施状況を明らかにするために、高齢の方に日頃実施している方法で手を洗ってもらい、手を洗う前後の掌の細菌を採取すると、手洗い後の細菌数が増加していることもあります。手洗いの所要時間や方法は人によって異ります。その結果を提示すると、手洗いの所要時間は長くなりましたが、手洗い後の細菌数は必ずしも減少しませんでした。
　マスクの着脱では、マスクが顔に密着するように装着したり、マスクを外す際に手の汚染を防いだりすることが重要ですが、意識されていないことがあります。そのため、正しい手洗いやマスクの着脱方法の紹介等もしています。

　このような研究活動を通して、高齢の方が生活リズムを整え、肺炎や感染症を予防するための行動を効果的に行えるように取り組んでいます。

ホリスティックケアにおける音楽療法と看護の協働

関連するSDGsの国際目標

人間看護学部　人間看護学科　　教授　　横井　和美
研究分野　：臨床看護学

概要：
慢性の病いをもつ方は、病気からくる身体的な問題だけでなく、病気からくる不安などの心理的な問題、社会参加や人間関係など様々な問題をかかえて生きていきます。
このような慢性の病いをもって生活されている方に、代替療法の一つである音楽療法を看護援助と組み入れて提供できるケアの方法を探究しています。
現在、滋賀県内で活動できる音楽療法士の方と身体障がい児者や要介護高齢者などを対象にケアの場に音楽療法を組み入れる活動を行っています。
そして、長期にわたり持続する病いと共に生きる人とその家族が、病気と折り合いをつけて、その人らしい生活を送ることを目指しています。

■ホリスティックケアにおける音楽療法と看護の協働のあり方

日本音楽療法学会認定の音楽療法士の方と共にNPO法人音楽療法の会さざなみを結成し、滋賀県内での音楽療法の普及活動に努めています。
身体障害者通所施設や高齢者のディサービスで実施したり、介護予防のための健康教育として市町村と共同して音楽療法の体験教室を実施しホリスティックケアとしての看護介入の視点を探っています。

■慢性病者のセルフマネジメント支援

人間看護学研究科　高度実践看護学部門の慢性疾患看護分野で慢性疾患看護専門看護師の育成にかわっています。糖尿病や慢性心不全、慢性呼吸器疾患など慢性疾患を有した方がその人らしく生活していけるセルフマネジメント支援についても追究しています。

続発性リンパ浮腫のセルフケア継続支援

関連するSDGsの国際目標

人間看護学部　人間看護学科　　准教授　　荒川　千登世
研究分野：成人看護学　臨床看護学　看護教育
ＨＰ：　http://www.nurse.usp.ac.jp/seijin/

続発性リンパ浮腫は、乳がんや婦人科がん（子宮・卵巣）などの術後におこり、一度発症すると難治性で、疼痛、関節可動域の制限などによる日常生活動作の困難、仕事の継続困難、服装の変更など、生活全般にわたって支障をきたします。治療としては外科的治療（リンパ管静脈吻合術）と保存的治療（スキンケア・リンパドレナージ・圧迫・運動・日常生活での注意）がありますが、根治的治療法はなく、できるだけ早期にケアをおこなうことや軽減した状態を維持し悪化させないための「セルフケアの継続」が大切になります。セルフケア継続支援として、「浮腫の状態の見える化」「カンタン＆効果的なセルフケア」「リンパ浮腫とセルフケアの理解（知識・技術）」などに取り組んでいます。

■ 浮腫の状態の把握

☆ 体組成
☆ 浮腫評価装置（特許）
☆ 周囲径
☆ ３Dスキャナー
☆ 皮膚の状態のセルフチェック

見える化

■ 浮腫とセルフケアの理解

☆ リンパ浮腫外来
☆ セミナー
☆ パンフレット

知識・技術

QOL
（生活の質）

■ セルフケア

☆ 徒手リンパドレナージ
☆ 圧迫着衣・ウエア
☆ 運動
☆ スキンケア
☆ 日常生活上の注意

カンタン＆効果的

■ 日常生活での工夫・知恵

☆ セルフヘルプグループ
☆ 服・靴・アクセサリーの工夫
☆ 趣味や楽しみの実現

生活を楽しむ

＜特許・共同研究等の状況＞
浮腫評価装置：特許第5953490号（株式会社タニタ、京都大学、滋賀県立大学）
リンパ浮腫外来、自己管理支援プログラムソフトの開発、圧迫着衣・ウエアの開発、など（京都大学、大阪医科大学、企業など）

健康寿命の延伸に向けた研究への取り組み

人間看護学部　人間看護学科
講師　　岡﨑　瑞生

研究分野　：看護学、老年看護学、生活の質

概要：生命・生活の質や対象者の思いに関する研究、高齢者や障害のある人々の支援につながる研究をしています。対象は、高齢者、障害のある人々、家族などです。

■高齢者の社会参加についての研究

前期高齢者の社会参加について、エスノメソトロジー（民族看護学的研究方法）で調査した結果、大テーマ【高齢者自身が経験した事，興味があったことや元々仕事として行っていたことを生かして、ボランティアという形で活かすことにより、他人の役に立っている、楽しい、嬉しいというような気持ちが生まれ、それが自分自身の変化や生きがい、やりがいにつながっている】ことが導き出された。

①社会参加へのモチベーションともともと持っている能力が社会参加への基盤となり、そこに個人の文化的側面に連動した環境の変化や情報などが加わることによって、社会参加が生じることが示唆された。

②いったん社会参加を体験した高齢者は自身の変化を体験し、満足感を得ることで、さらに社会参加をするという好循環に入ることが認められた。

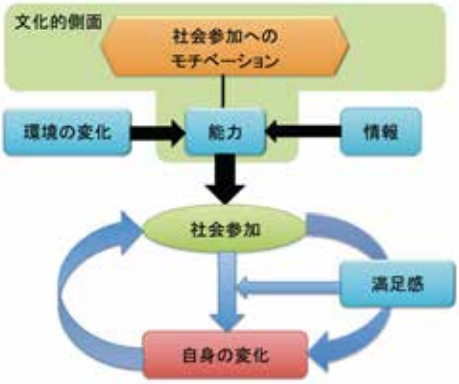
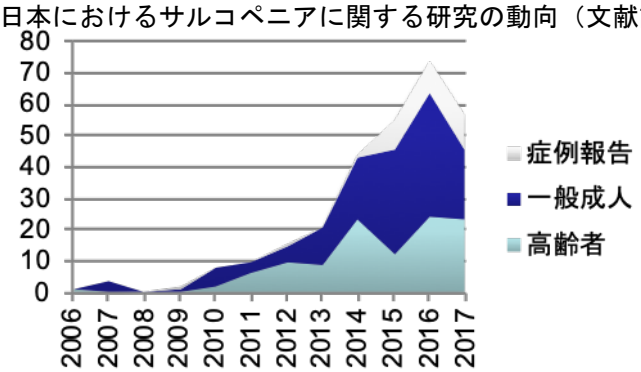
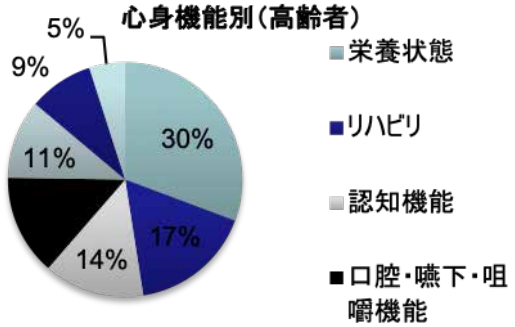


図1　高齢者の社会参加の構造

■サルコペニア、フレイルについての研究

日本におけるサルコペニアに関する研究の動向（文献調査）





サルコペニアに関する研究は、近年【疾患別】よりも【心身機能別】が増加傾向にあることが分かった。介護予防に向けてADLの維持・向上のために、生活機能に焦点を当てた研究が増えていくことが期待されるが、「高齢者」で「運動療法・リハビリ」との関連についての検討が少ない点が課題と考えられた。

■エスノメソトロジー（民族看護学的研究方法）を用いた研究

1型糖尿病者の思春期における心理的体験について、エスノメソトロジーを用いて研究した結果、思春期の1型糖尿病者の体験世界を表す大テーマ「【分からない】事や【めんどくさい】事、【困る】事が多く混在し、【もうしょうがない】と考えないようにしたり、放っておいたり我慢したりしている中で、2型糖尿病とは違う事と経済的負担は【言いたい】事として発信している。」が明らかになり、実践への示唆として、混乱しがちな【分からない】事を整理し、知識に関する事について再確認の場を提供する、認知の発達段階を踏まえた指導・教育方法を用いて認知能力の変化する12歳前後に指導・教育方法を変えて再教育する、思いの表出の仕方を支援し、1型糖尿病について社会的理解を広める事の必要性が得られた。

脳卒中サバイバーのセルフマネジメントプログラム開発

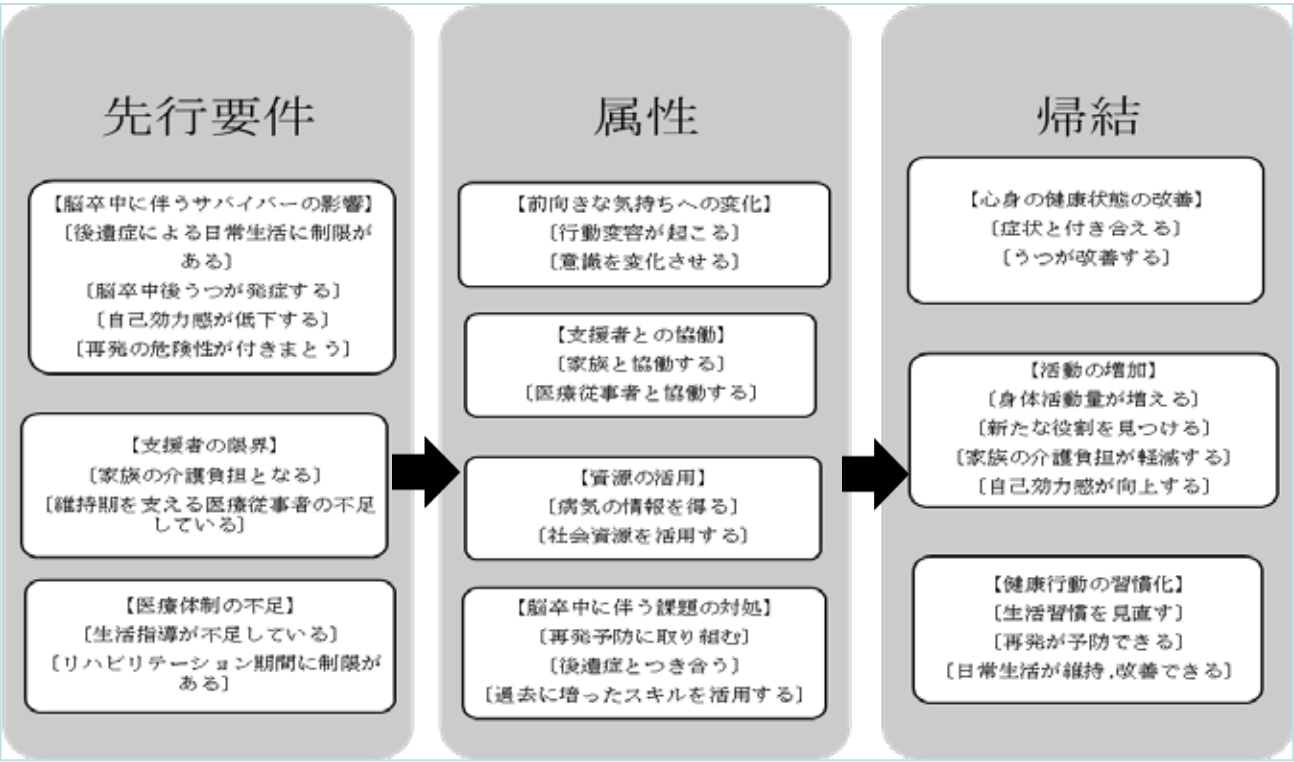
関連するSDGsの国際目標

人間看護学部　人間看護学科　　講師　　片山　将宏
研究分野　：成人看護学　脳卒中看護　外来看護

脳卒中は、わが国では死亡原因の第4位を占めます。また、介護が必要となる最大の原因でもあります。脳卒中サバイバーとは、①高血圧症、糖尿病などの生活習慣病をもっており、脳卒中再発の危険が一生付きまとう、②運動麻痺や失語などの後遺症があり、日常生活に支障をきたす、③支援する医療従事者がほとんどいない、という特徴をもちます。脳卒中サバイバーは、このような特徴から、これまでに大切にしてきた生活や人生を縮小させながら生きていかなければならない状況に追い詰められます。そこで、脳卒中サバイバーが健康でその人らしく生きること、well-beingを目指すことを目的とした「オンラインで行う脳卒中サバイバーのセルフマネジメントプログラムの開発」に取り組んでいます。

■脳卒中サバイバーのセルフマネジメントの概念分析

脳卒中サバイバーは、他の慢性疾患とは違うセルフマネジメントの特徴をもちます。そこで、概念分析を行った結果、脳卒中サバイバーのセルフマネジメントを「脳卒中サバイバーが前向きな気持ちに変化できるように支援者と協働しながら資源を活用し、 脳卒中に伴う課題に対処すること」と定義しました。この概念図を基にセルフマネジメントプログラム開発を行いました。今後は、脳卒中サバイバーを対象にプログラムによって得られる効果を明らかにしていきます。



脳卒中サバイバーのセルフマネジメントの概念図

フレイル状態にある高齢者への意思決定支援

関連するSDGsの国際目標

人間看護学部　人間看護学科　　講師　　松井　宏樹
研究分野　：老年看護学

概要：フレイルとは、要介護状態に至る前段階として位置づけられ、多面的な問題を抱えやすく、健康障害を招きやすい状態と言われています。その一方で、フレイルには、適切な介入により再び健常な状態に戻るという可逆性も示唆されています。つまり、フレイル状態にある高齢者は、健常な状態と要介護状態との狭間の時期にあると言えます。そのため、フレイル状態にある高齢者が自分自身の人生をどのように生きたいか支援していくことは、高齢者の生活の質を高めることにつながると考えています。

■フレイル状態にある高齢者への意思決定支援の質向上に向けた調査（文献研究）

文献調査の結果より、高齢者がフレイルに該当した場合や体重減少、筋力低下等の身体的変化を本人が自覚した際には、本人の意向を確認し始めるきっかけになると考えられました。一方、フレイル状態にある高齢者への意思決定支援の内容やそのプロセスについては、さらなる調査が必要であると考えています。

■フレイルという言葉の認知度

フレイルという概念が世間に浸透しているとは言い難く、フレイルと告げられた高齢者であっても、そのリスクや今後の生活への影響を想像することは難しいのではないかと考えています。今後、フレイルという言葉の認知度を高めるための活動や教材の開発等を目指しています。

＜論文＞

・**「意向確認の開始時期およびその内容に関する文献検討-フレイル状態にある高齢者への意思決定支援の質向上に向けて-」**松井宏樹（滋賀県立大学人間看護学部　人間看護学研究　(19)　11 ～ 17　2021年03月）

小・中学生を対象にしたメンタルヘルス教育の検討（教職員・保護者も含む）

関連するSDGsの国際目標

人間看護学部　人間看護学科　　教授　　甘佐　京子
研究分野　：精神看護学、家族看護学、学校精神保健

小学校高学年から中学校において、児童生徒は思春期を迎え自我形成に向けて大きな葛藤を抱える時期です。またこの時期、統合失調症・若年性うつ病等の精神疾患の発症時期でもあります。いじめ認知件数・不登校数はこの時期に増加する傾向にあり、生徒児童は、多くのストレスにさらされています。この時期をうまく乗り越えることが、青年期・成人期への発達過程へとつながります。自らの精神的健康をいかに維持増進していくか、その方法論を伝えていくことにより、自らのレジリエント能力（回復する能力）を高め、いじめ等による不登校・自殺の防止や精神疾患の早期介入にもつながると考えています。

■小中学生を対象にしたメンタルヘルス教育の実践

ストレスマネジメントに関する学習だけではなく、思春期の子どもたちがり患しやすい精神疾患に対する知識等も含めたメンタルヘルス教育を、展開しています。精神疾患については、早期に発見し治療を行うことで、回復の状況も変わってきます。学習を通して、子どもたち自身が自分の体と心の関連や、健康について知識を持つことで、自己のメンタルに関心を抱き、大切できる力をもつことを期待しています。

今後、動画やテキストなど子どもの発達年齢・理解力に応じた教材の開発も目指しています。

■教職員・保護者の方に向けたメンタルヘルス教育の実践

学校現場では様々な、メンタルにかかわる問題が生じています。いじめや、不登校の背景に、重要な精神疾患が存在しているケースも少なくありません。まず、現場の先生方が、精神疾患の特性を知り、正しくアセスメントしていくことが必要です。また、精神疾患についての偏見を、少しでも小さくするために、保護者を含む地域のみな様に、精神疾患についての正しい知識を持っていただきたいと考えます。

■精神疾患患者の家族（親・きょうだい）を対象にした支援

現在、若年の精神疾患患者（以下、患者とする）を子どもにもつ親および同胞（きょうだい）の関係性に焦点を当てた新たな家族支援アプローチとして、『親による「同胞へのプレ心理教育」スキルトレーニングプログラム』を検討しています。患者同様その同胞（きょうだい）は、統合失調症等の好発年齢もしくはそれに近い年齢であることが予測されます。同胞である子どもたちが正しい情報や知識を得ることは発症予防の観点からも重要です。しかし、日本では、患者を持つ家族の中で、「子ども」に対して病気を語ることはタブー視されてきました。思春期の時期にあたる同胞に疾患について、最初の伝え手となる親が精神疾患や・症状を同胞に伝えるスキルを獲得することは、親としての自信の回復にもつながり、家族コーピングの強化にもつながると考えます。

地域包括ケアの時代における地域・在宅看護の専門性

関連するSDGsの国際目標

人間看護学部　人間看護学科　　教授　　新井　香奈子
研究分野　：地域・在宅看護学　老年看護学

地域共生社会の実現を見据え、現在わが国では全世代を対象とした地域包括ケアシステムの構築が急がれています。多様な病気や障害を持ちながら地域で暮らす療養者・家族の支援や支援体制、および看護職の専門性の確立に貢献したいと考えています。

■難病支援終了事例検討会（デスカンファレンス）を土台にしたALS患者支援体制の構築

ALS療養者への難病保健活動（健康福祉事務所）を実施する中で見えてきた課題の解決に向け、平成29（2017）年から健康福祉事務所を実施主体としたデスカンファレンスに助言者として参加しています。事例の全経過を多職種間でポジティブシンキング思考で振り返り、次の支援に生かすことを積み重ねることは、支援者の資質向上や連携強化につながりました。また、このカンファレンスを土台に地域課題および地域の強み抽出に向けた検討を実施し、ALS患者支援体制（レスパイト入院先の確保、在宅での看取りなど）の構築を図っています。

■医療的ケア児の地域支援体制の構築

医療的ケア児の支援者として関わる県と市の保健師が共同で実施した、１）医療的ケア児ニーズ調査、２）医療的ケア児地域資源把握調査に助言者として参加しています。令和2年には、その結果報告の場（保健・医療・福祉・教育・行政他）において、各機関の課題と今後の取り組みについての共有・確認を行いました。この会議の場は、顔の見える関係づくりとＡ市の医療的ケア時の地域支援体制構築の第一歩につながりました。

■がん患者・家族の意思決定を支える在宅の場の認定看護師による看護相談室の開設

Ｂ市内の複数の訪問看護ステーション所属の認定看護師とがん患者・家族に対する看護相談室を地域に開設し、個別相談とグループ相談（サロン）を定期的に実施しました。参加者の許可のもと相談内容の分析を行いました。相談に来られた方は、診断後間もない、治療中、治療終了後の訪問看護利用経験のない患者本人や家族でした。この相談室では、相談者が利害関係なく、治療や身体状況、医療者との関係、家族関係など様々な苦悩を認定看護師に安心して話すことのできる場となりました。この話すという行為は、自らの思いの整理と自己決断していくことにつながり、また過去の体験（苦悩）に対するグリーフケアの場ともなりました。認定看護師の看護専門職としての機能の充実につながりました。

■高齢者へのフットケアによる介護予防支援

デイケア利用の高齢者に対し週1回のフットケアとセルフケア指導を行い、足指・爪の状態と自覚症状、運動機能、QOLの視点からの分析を行う調査を実施しました。高齢者の多くに皮膚・爪・足のトラブルが生じていましたが、1回20分の看護師によるフットケアにより、皮膚・爪、循環状態の改善がみられました。また、本人だけでなく家族の「足」への興味が高まり、爪切り方法の改善、靴下・靴の選び方や着用の仕方などのセルフケアの向上につながりました。継続的なフットケアを楽しみに、デイケアを休む回数の減少も見られました。このように、一足飛びに運動機能改善には至りませんが、高齢者の自立支援、介護予防支援につながった支援となっています。

■高齢者の口腔機能向上を促す支援の開発や摂食・嚥下障害者の主介護者に向けた支援

地域で生活する一般高齢者を対象に、口腔機能向上のセルフマネジメント力を高めるプログラムの開発やその効果の分析に関わっています。また、摂食・嚥下障害者の主介護者への訪問看護師による支援についての検討も行い、多職種協働による支援体制の確立や訪問看護師の専門性の確立を図っています。

対人援助関係におけるインボルブメント

関連するSDGsの国際目標

人間看護学部　人間看護学科　　教授　　牧野　耕次
研究分野　：精神看護学

概要：
　インボルブメントとは、遺伝子や細菌，栄養素，細胞などの実態を伴う物質，もしくは因子や要因など物質を伴わないシステムなど他のシステムと関係を持つ関与の意味で使用されている。本来，2つ以上の変数が関係しあう場合に使用される用語である。

　看護では、「巻き込まれ」や「かかわり」「関与」などと訳されているが、インボルブメントは臨床看護師にまで、定着している用語とは言い難い現状がある。看護師が患者とかかわる場合、知らない間に感情的に巻き込まれていることに気づく必要がある。もし気づかなければ、看護師が持つ感情や思考、価値観、責任と、患者が持つ感情や思考、価値観、責任との間で、「押し付け」など、様々な問題が生じる。

　精神科の看護師は、知らずしらずに巻き込まれた経験を振り返ることで、かかわり巻き込まれることとはどういうことなのかを実体験から体得（スキルを習得）していることを、私たちは示唆した。さらに、精神科の看護師は、そのふりかえりの経験を活かすことで、意図的にかかわり巻き込まれながら看護していることも示唆してきた。

　このインボルブメントは、看護だけのスキルではなく、教員や弁護士などの対人援助職、もしくは子育てや介護などの役割遂行にも応用可能な概念である。コミュニケーション理論は、客観的な枠組みにより、店舗の接客や接遇などのマニュアル的な対応には非常に有効である。しかし、かかわる際に、互いの感情や思考、価値観、責任などがかかわりに反映し、多様で複雑なかかわりが必要な関係性の場合にはマニュアルによる、対応には限界がある。そのような場合、インボルブメントは非常に有効な枠組みとなる。

　互いの感情や思考、価値観、責任などの境界（バウンダリー）をインボルブメントの中で調整することで、それぞれの納得のできる結果にそれぞれが主体的に導いていく可能性が開かれる。虐待や各種ハラスメント、いじめや孤独など、現代の多くの問題に対するキー概念として、インボルブメントが注目され重要となる時代が必ず来ると思われる。

　インボルブメントは、見えない境界（バウンダリー）を自覚するなど意識しながら扱う必要がある。それは、誰もがほとんど無意識に、時に意識して行なっていることである。

　今後私たちは、かかわりの中で、誰もが境界を意識し、扱うことができるようになるような研究をしていくことが求められている。

ひきこもり状態にある人と家族への支援

関連するSDGsの国際目標

人間看護学部　人間看護学科　　講師　　川口　恭子
研究分野　：公衆衛生看護学、保健師活動
ひきこもり、家族支援

「ひきこもり」の課題については、以前は青年期に焦点をあてた対策が取られていましたが、最近では、ひきこもりの状態にある人の高年齢化や長期化，それに伴う親の高齢化，経済状況の困難化などの課題があることが報告されています。

長期化による二次的影響を防ぎ支援を効果的に行うためにも、早期の相談が望まれます。そのため、適切な時期に相談に至るための支援方法を研究しています。

人間看護学部

■　家族からの相談に関する研究

相談については、ひきこもりという特性から、本人からの相談よりも家族からの相談が多いという傾向があります。家族へのインタビュー調査を通して、家族がどのような経験をして相談に至っているかを研究し、よりよい支援の方法について模索しています。

■　相談しやすい環境づくりについて

支援を行う際は、本人や家族等からの相談を受けて開始されることがほとんどです。適切な時期に相談につながることで、より効果の高い支援を得ることができます。ひきこもり状態にある人が適切な時期に適切な相談機関につながることができる環境づくりが必要だと考えています。

がん患者への意思決定支援

関連するSDGsの国際目標

人間看護学部　人間看護学科　　講師　　國丸　周平
研究分野　：在宅看護学、成人看護学、意思決定支援

がんに対する医療技術と治療法の発展により、がん患者の生存率は上昇を続け、患者ががんと共に生活を営む期間も長くなっています。治療方針から療養方法、生き方に至るまで多くの選択を求められるがん患者が、意思決定をすることができる支援について研究しています。

■肺がん患者が治療を緩和ケア中心に変更することを決めるまでの関わり

治癒を目指す治療から緩和ケア中心の医療へと転換する時期にあるがん患者は「生きたい」という希望を持ちながら、治療に対する諦めや死を意識しており、精神的に不安定な状態にあると言われています。そのような状況下でも、がん患者は人生の最終段階の過ごし方に関する意思決定を行わなければなりません。このような時期における意思決定支援の在り方について、早期発見・治療が難しいとされている肺がん患者と看護師との関わりに焦点を当てて研究を進めています。

■がんの5年相対生存率

右図は主要部位別に示したがんの5年相対生存率です。多くの部位で上昇傾向にあります。生活をがんと共にする期間が長くなる分、治療や生活に対するサポートが必要になります。

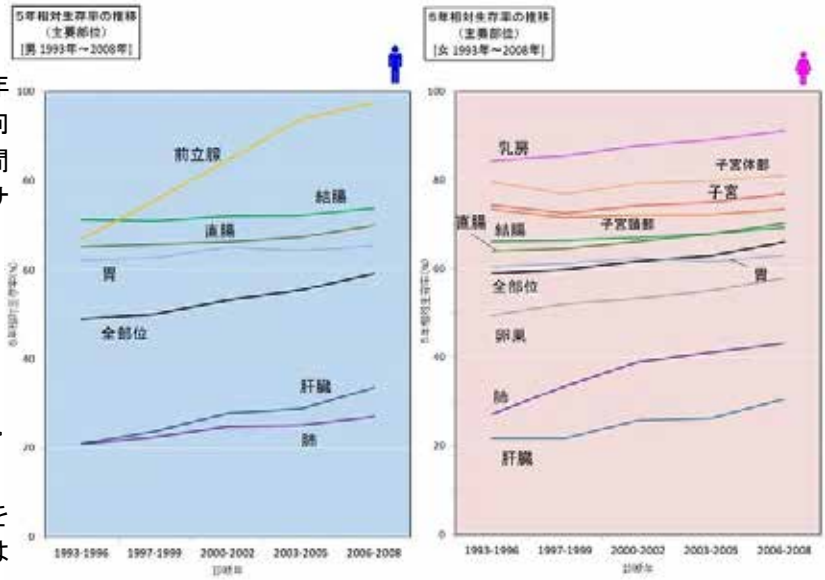


図. 主要部位別，男女別に見たがんの5年相対生存率

国立がん研究センター　がん情報サービス
(https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/annual.html)より転載

■アドバンスケアプランニングからみる意思決定支援の在り方

自分がどのように生きたいか、最期をどのように過ごしたいかを考えることは病気や障害の有無，年齢にかかわらず全ての人に必要であると言われています。その方が人生を考えることができるよう、話し合い（意思決定支援）を早期から繰り返し行うプロセスをアドバンスケアプランニング（人生会議）といいます。

話し合いが繰り返し行われることで自分自身の人生観を見つめ直すだけでなく、病気や障害により意思表示が出来なくなった後も、希望を理解した家族や医療者がその人に代わって意思決定を行うことができるようになります。これは、がん患者に対しても同様で、がんと診断されたとき、治癒を目指して治療に取り組むとき、治癒が難しいと判断されたとき等、各時期における意思決定支援の在り方を検討する必要があると考えています。

対話としての英語表現力の育成
ー言語使用者としての発達を目指してー

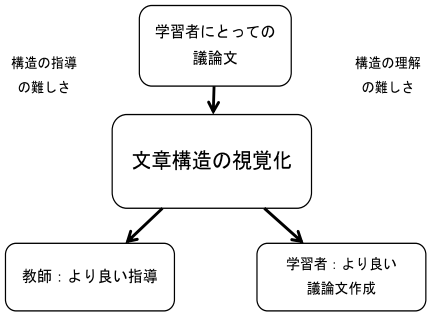
関連するSDGsの国際目標

全学共通教育推進機構　　准教授　　坂本　輝世
研究分野　：外国語教育論、ライティング教育

概要：日本語を母語とする英語学習者が、リーディング／ライティング学習によって対話としての英語表現力を発達させるためには、どのような指導・援助が可能か、また、そのような英語表現力を育成することの利点は何なのか、について研究しています。

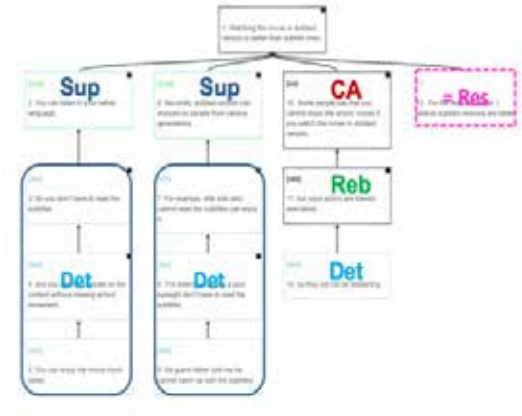
■ 英語ライティング学習における「構成・組織化」の問題

日本語母語話者である英語学習者の書く議論文について自分の立ち位置をはっきりさせなかったり、議論の一貫性に欠けたりする傾向が指摘されてきています。しかも、構造面での問題は文法や語法に比べても指導が難しく、説明だけではなかなか学習者に理解されにくいことも、これまでの研究で明らかになっています。そこで、学習者の書いた議論文を図式化し、視覚的に自分のテキストを俯瞰することで、より良い指導と学習が可能になるのではないか、という仮説に基づく研究をしています。



■ 樹状図による文と文の繋がりへの気づき

TIARAという注釈ツールを用いると、学習者の書いた英語パラグラフの文の配列を図式化し、英語の議論文として不適切な文の流れを明示できます。これによって学習者の理解を助け、ひいては、注釈ツールの力を借りなくても学習者が文を適切に配列することができるようになるかどうかを実証的に確かめようとしています。



樹状図の一例

■ 対話としてのリーディング／ライティング

同時に、このような問題は、日本語と英語のいずれにおいても「対話する」という視点から議論文ライティングを学んだ経験が少ないことが一因ではないか、という視点に立ち、「批判的な読み」に基づいて自分の立場を明確にしつつも、他者との対話として議論を行い、他者の声を取り入れながら自分の声を作り上げていくためには、どのような気づきが必要なのか、その過程を観察し分析する質的研究も行っています。

■ SDGsとのかかわり

英語を日本語に、また日本語を英語に置き換えるだけなら、機械翻訳で事足ります。しかし、それぞれの言語がどのような論理構造を前提とし、どのようなスタイルを心地よく感じるか、という違いに気づかなければ、本当の意味での理解も発信もできません。さらに、同じ言葉を使うもの同士でも、相手が自分とは異なる経験と価値観をもつことを自明の出発点としなければ、他者との対話はできません。

迂遠なようですが、対立の解消が容易でない問題（例えばジェンダー平等、不平等の是正など）について考えるときにも、私たちの使う言葉そのものが、様々な対立する視点と声によって成り立っていることを知り、さらには、そのような対立を含み込むことのできる言葉を一つ一つ創り出していくことが重要だと思っています。

Factors of Rural-Urban Learning Achievement Inequalities in Francophone Sub-Saharan African Primary Education.

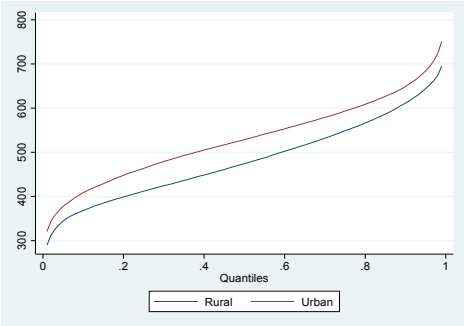
関連するSDGsの国際目標

全学共通教育推進機構　講師　　SANFO M.B. Jean-Baptiste
研究分野：教育・教育開発・教育経済学

Access to education has increased in Sub-Saharan Africa, but countries face a learning crisis exacerbated by rural-urban learning achievements inequalities. Literature suggests that tangible as well as intangible factors explain rural-urban learning inequalities. The current research investigates the proportion that each type of factor explains in the rural-urban learning inequalities and it uses re-centered influence function decomposition with the Program for the Analysis of Education Systems" (PASEC) 2014 data.

■More access to education does not necessarily mean learning.

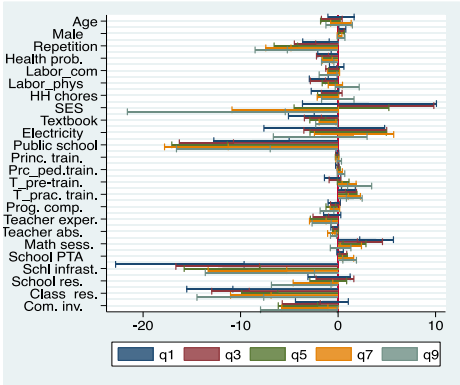
・Access to education has increased globally, but many students in developing countries do not learn because these countries are facing a learning crisis. The crisis is exacerbated by rural-urban learning achievements inequalities observed in many regions, including Sub-Saharan Africa, with evidence that urban areas tend to outperform rural ones. Eliminating inequalities may contribute to local socioeconomic development, and it can also help local communities adapt to the fast-changing environment we all face.



Rural-urban mathematics inequalities in Francophone Africa (Benin, Burkina Faso, Burundi, Cameroon, Chad, Congo, the Ivory Coast, Niger, Senegal, Togo

■ Tangible factors explaining rural urban learning achievements.

School factors explain learning inequalities more than family ones.

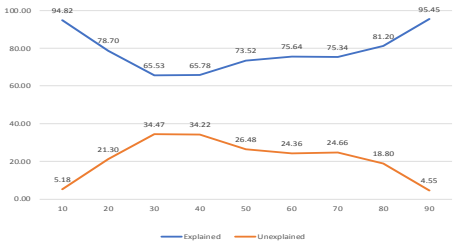


Factors of rural-urban mathematics inequalities

■ Intangible factors explaining rural-urban learning achievements

Intangible factors account for 4.50 to 34.50% of the achievements inequalities and seem to be more important for students on the lower tail of the distribution.

■Learning inequalities can be reduced by addressing both tangible and intangible factors explaining them. Intangible factors need to be captured through qualitative studies.



Tangible VS intangible factors of inequalities

2010年代以降の自伝的アメリカ文学作品における対テロ戦争と身体性の文化史的研究

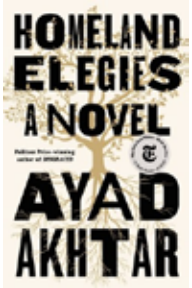
関連するSDGsの国際目標

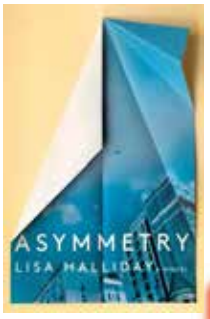
全学共通教育推進機構　　講師　　近藤　佑樹
研究分野：現代アメリカ文学・文化

概要：遠くない過去に始まった対テロ戦争を自伝的な作品の中に組み込んだ21世紀のアメリカ人作家による小説を、「戦争」と「身体性」という観点から読み解くことで、近年のアメリカ文学における「対テロ戦争」のイメージの変化を検証するものです。

■ メタファーとしての「戦争」と「身体性」

今までは、フィリップ・ロスという現代アメリカをかつて代表していた作家の後期作品における現代アメリカ社会の諸相を、文字通りないし比喩的な意味における「戦争」と「身体性」という観点から読み解くことを研究テーマとしていました。この文脈における「戦争」は、第二次世界大戦のような総力戦に誘発され、アメリカ国内で人種差別により生じた暴動や、一見平和な町を突如襲う感染病など、現実の戦争とリンクして比喩的に展開する事象を含みますし、「身体性」も単に物理的に体現される人間の体を巡るものというよりも、いかに人間の身体が感染や戦傷によって損なわれ、社会的な烙印を伴っていくのか検証するための概念でした。





■「対テロ戦争」のイメージの変容

そういった研究の中、9.11同時多発テロの後に始まった「対テロ戦争」、あるいは時折濫用される「テロリズム」に対するイメージが、ロスが作品を書いていた2000年代初頭のアメリカと、2020年代のアメリカとでは確実変わりつつあるのではないか、ということについて考えるようになりました。そこで、フィリップ・ロスに影響を受けた後続の作家たちはまた彼とは異なった形で「対テロ戦争」を描こうとしているのではないか。だとすればその描き方はどう変わってきているのか、というテーマを設定しました。その上で、「戦争」や「身体性」という概念を用いて、作品の背後にある「対テロ戦争」を巡る複数のレイヤーを明らかにしていくことを目的としています。

■ 文学と現実のはざまで

文学研究だけで、画期的な病気の治療法が発見できるわけでもありませんし、また地球環境の抜本的な改善にも直結しません。しかしながら、文学作品とは—もちろん文学に限定されることではありませんが—常にそういった作品を生み出す土壌としての社会を映し出す鏡であると同時に、その社会に影響を与え、その形を変容させてしまう存在であると言えるでしょう。その点からすれば、文学作品が作り出す複雑に入り組んだ世界に体系的な言語を与えることで、少しでも理解することにある種の意義はあるはずです。そのような問題意識の下、私は現代アメリカ文学の研究を続けています。

地域特性を活かした「地域ビジョン」の創造支援
～地域診断法及び総合的な学習の時間における展開～

関連するSDGsの国際目標

地域共生センター　　教授　　鵜飼　修
研究分野：まちづくり、地域活性化、
コミュニティビジネス
http://eco-minka.com

地域まちづくりを推進する際に「軸」となる「地域ビジョン」を設定し、共有する手法「地域診断法」のノウハウを提供します。集落での基本計画づくりや、小学校の総合的な学習における地域まちづくり学習のコンテンツも提供することができます。

■地域診断法

地域診断法は、地球環境と共生した人間社会、地域の特性を活かした地域活性化を目指して、地域のあるべき方向性を明らかにする手法です。調査形式と住民参加によるワークショップ形式があります。調査形式では、設定されたテーマに対して、エコロジカルプランニングの視点で地域の特徴をマトリックス分析し、バックキャスティングのための、地域のあるべき方向性、キャッチフレーズなどを提示します。市町村レベルから集落レベルまで対応可能です。

【実績（外部からの委託含む）】
守山市地域診断、永源寺地区地域診断　など

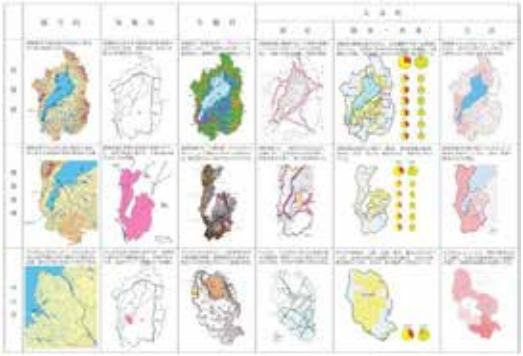


図1：地域診断法のマトリックス分析

■地域診断法ワークショップ

地域診断法ワークショップは、地域診断法の理念を踏襲しつつ、住民参加形式で「1日で」地域のビジョンを見出す手法です。５つのステップで構成され、ファシリテーターの指導のもと、地域住民と「よそ者」が協働してワークショップを行い、未来に継承したい地域の特徴を明らかにします。

【実績（依頼業務含む）】
彦根市下石寺町、薩摩町、上岡部町、稲枝北学区、稲枝地区まちづくり協議会、東近江市五個荘川並、米原市梓河内、井之口、福井市社南公民館　ほか

図2：地域診断法WSのハンドブック

■総合的な学習の時間における地域診断法WSの実施

小学校6年生の総合的な学習の時間における「地域学習」として地域診断法WSを応用したプログラムを開発しました（マニュアル化済み）。学習指導要領で推奨されている、探求プロセスと同様に、課題の発見、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現が繰り返し実施され、「地域」をテーマにした児童生徒の創造性・愛郷心を育むプログラムです。

【実績】
彦根市稲枝北小学校（2014,15）ESDプログラムの一環で実施
多賀町大滝小学校（2016～）多賀町のまちづくりと連動

図3：小学校用のマニュアル

＜特許・共同研究等の状況＞
・博報財団第13回助成「地域診断ワークショップを活用したまちづくり学習プログラム・ツールの開発」2018年度、協力：多賀町大滝小学校、多賀町

「あたりまえのくらし」と「無事の文化」を守る まちづくり手法の開発・地域づくり人材の育成

関連するSDGsの国際目標

地域共生センター　　講師　　上田　洋平
研究分野　：地域学、地域文化学

地域のあたりまえのくらしを守り、風土に根ざした文化を再生する。「ここで、ともに、無事に、生きていける地域」を実現するための方策や場の開発に取り組んでいます。

■地域をまるごと「診察」し「無事」への処方を示す「まちづくりのホームドクター」

華やかで「高級」なものだけが文化ではありません。とくに地域文化は人々が「ここで、ともに、無事に、生きていく」ために育み磨き上げてきた「生活技術」としての側面が強い。地域文化とは「無事の技術」あるいは「無事の文化」と言うこともできます。ところがいま、地域では「無事のくらし」を支えてきた基盤がじわじわと、しかし確実に崩れはじめており、それを「静かなる有事」と呼ぶ人もあります。

「人の空洞化・土地の空洞化・むらの空洞化」が進行するなか、いかに地域の「無事」を取り戻すのか。人と自然、人と人、人と歴史のつながりをいかに結び直し、いかに地域を持続可能にしていくのか。

むやみやたらな活性化ではなく、風土に根ざした「あたりまえのくらし」の持続と「無事のまちづくり」、地域が誇る「ブジネスモデル」の発見と発信のために、地域での伴走支援をしています。専門家として開発し・提唱している技法もありますが、現実には、まちづくりに関わるあらゆる現場に乞われて足を突っ込んでいます。例えるなら「からだ」も「こころ」も「たましい」も、地域をまるごと「診察」し、地域の「無事」への「処方」を示す「まちづくりのホームドクター」のようなことをしています。

写真：地域のくらしと文化を地域の人々自身が再評価し、多世代のつながりを取り戻す「ふるさと絵屏風」の手法を開発・提唱。全国50地域。

まちづくりを担う人材を育成する地域共育プログラムの構築、社会人のリカレント教育、市町の人材養成プログラムの開発指導など、あらゆる「人づくり」を支援しています。

■地域づくり人材の育成

まちづくりを担う人材を地域の人々とともに育成する「地域共育」プログラムの構築・実施に取り組み、学生を地域に連れ出すほか、社会人のリカレント教育や学びなおしのプログラムづくり、市町の人材育成プログラムの開発・指導を行っています。あらゆるネットワークを活用し、さまざまな種類の人材を「まぜて・ちらして・つなぐ」人と学びのプラットフォームづくりを目指しています。

学生×地域×Xで地域の文化・くらし再生

＜特許・共同研究等の状況＞
・JST-RISTEX「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域研究開発プロジェクト「未病に取り組む多世代共創社会の形成と有効性検証（代表：慶應義塾大学環境情報学部渡辺賢治教授、平成26～30年度）」

【滋賀県立大学　研究者一覧】

研究者別　研究分野・キーワード一覧

学部学科等		職名	氏名	研究分野・キーワード
環境科学部	環境生態学科	教授	小泉　尚嗣	地震地下水学　地震，地下水，地殻変動
		教授	伴　　修平	水圏生態学、プランクトン生態学
		教授	丸尾　雅啓	水圏化学、分析化学
		教授	浦部　美佐子	陸水生物学，生態，底生動物，寄生虫，分類
		教授	後藤　直成	陸水学，環境科学，生物地球化学，物質循環
		准教授	野間　直彦	植物生態学
		准教授	吉山　浩平	理論生態学
		准教授	堂満　華子	古環境学，微古生物学（浮遊性有孔虫）
		准教授	細井　祥子	環境微生物学、分子微生物学
		准教授	尾坂　兼一	森林水文学　生物地球化学
		講師	籠谷　泰行	森林生態学
		講師	肥田　嘉文	環境科学、影響評価科学
		講師	荒木　希和子	植物生態学，分子生態学
		講師	工藤　慎治	大気科学，大気汚染物質，環境動態，発生源解析
	環境政策・計画学科	教授	井手　慎司	水環境管理
		教授	上河原　献二	環境法、環境政策、地球環境条約制度、自然保護制度、外来水生植物管理
		教授	高橋　卓也	森林政策・計画、環境経営
		教授	香川　雄一	環境地理学、都市社会地理学、政治地理学
		教授	村上　一真	環境経済学，開発経済学，環境政策論，地域経済・政策論
		准教授	瀧　　健太郎	流域政策・計画、EcoDRR、グリーンインフラ、防災・減災
		准教授	林　　宰司	環境経済学，環境政策
		准教授	和田　有朗	環境政策，環境計画，環境システム，地域システム
		准教授	平岡　俊一	持続可能な地域づくり、市民参加・協働、NPO、環境社会学
		講師	平山　奈央子	湖沼流域ガバナンス、水資源管理、住民参加
		講師	吉川　直樹	環境システム学、ライフサイクルアセスメント
		講師	白木　裕斗	エネルギーシステム学，環境システム学
	環境建築デザイン学科	教授	陶器　浩一	建築設計、構造計画
		教授	村上　修一	ランドスケープデザイン、景観計画
		教授	髙田　豊文	建築構造学　応用力学　木質構造　地震防災
		教授	白井　宏昌	建築史、建築設計理論
		教授	芦澤　竜一	環境建築学
		准教授	金子　尚志	都市・建築環境設計、パッシブデザイン、クリマデザイン（室内気候のデザイン）
		准教授	ヒメネス　ベルデホ ホアン　ラモン	建築史・意匠、都市計画・建築計画
		准教授	轟　　慎一	都市計画、地域計画、都市政策、地域環境デザイン、景観論、集落論、生活空間論
		准教授	山崎　泰寛	近代建築史、建築メディア論、展覧会
		准教授	川井　操	都市史、建築計画
		講師	迫田　正美	建築歴史・意匠、建築空間論
		講師	高屋　麻里子	日本建築史、都市史
		講師	鄭　　新源	建築環境工学、建築環境設備、環境性能評価、環境心理
		講師	永井　拓生	建築構造、構造力学、数値解析、自然素材、建築保存・再生
	生物資源管理学科	教授	大久保　卓也	環境工学、水質工学、生態工学、水文学
		教授	須戸　幹	環境化学
		教授	杉浦　省三	魚類栄養学、養魚飼料学、水産増養殖
		教授	泉　　泰弘	作物学、栽培学
		教授	原田　英美子	植物科学、重金属、水生植物、伊吹山
		教授	入江　俊一	応用微生物、分子生物、バイオマス変換、リグニン、木質バイオマス
		准教授	岩間　憲治	土壌物理学、灌漑排水学、ＧＩＳ（地理情報システム）
		准教授	上町　達也	園芸学
		准教授	高倉　耕一	個体群生態学、行動生態学
		准教授	清水　顕史	植物遺伝育種学
		准教授	増田　清敬	LCA、環境経済学、農業経済学
		准教授	皆川　明子	生態工学、農業土木
		講師	飯村　康夫	土壌学
		講師	畑　　直樹	蔬菜園芸学、植物工場
		講師	泉津　弘佑	植物病理学
		講師	中川　敏法	反芻家畜、飼料開発、未利用資源、家畜飼養学、飼料開発学、動物栄養学
		講師	住田　卓也	植物病理学、微生物相互作用
		講師	加藤　恵里	獣害対策、農山村、コミュニティ、自然、地域資源、地域振興、野生動物管理

研究者別　研究分野・キーワード一覧

学部学科等		職名	氏名	研究分野・キーワード
工学部	材料科学科	教授	仲村　龍介	金属工学，ミクロ組織制御、固体材料中の拡散、鉄鋼、半導体薄膜
		教授	松岡　純	ガラス科学、熱物性、力学特性、無機材料
		教授	奥　　健夫	エネルギー、ペロブスカイト、太陽電池、結晶構造
		准教授	宮村　弘	金属材料学、金属間化合物、表面処理
		准教授	山田　明寛	無機材料
		准教授	秋山　毅	エネルギー環境材料
		講師	鈴木　一正	有機-無機複合材料、蛍光材料、溶液プロセス
		講師	鈴木　厚志	エネルギー、ペロブスカイト、太陽電池、第一原理計算
		教授	徳満　勝久	有機複合材料、高分子物性
		教授	金岡　鐘局	高分子精密合成、高分子機能
		教授	北村　千寿	有機合成化学、構造有機化学、芳香族化合物、色素、有機半導体
		准教授	竹下　宏樹	高分子構造、高分子物性
		准教授	谷本　智史	高分子機能､キチン･キトサン､微粒子､バイオミネラリゼーション､ペプチド材料､表面改質､金属イオン吸着
		准教授	加藤　真一郎	構造有機化学、超分子化学、物理有機化学
		講師	伊田　翔平	高分子合成、精密合成、リビング重合、高分子ゲル
		講師	竹原　宗範	生体機能材料、応用微生物学、遺伝子工学、有機環境材料
	機械システム工学科	教授	山根　浩二	内燃機関、バイオディーゼル、燃焼、ディーゼル噴霧、油化学
		教授	南川　久人	流体工学、混相流工学、気泡工学、ファインバブル、マイクロバブル
		教授	奥村　進	ライフサイクル工学、品質設計、メンテナンス工学
		教授	門脇　光輝	偏微分方程式論、特に数学的散乱理論
		教授	呉　　志強	振動工学、計算工学、振動、共振、形状最適化、最適設計、FEM解析
		教授	片山　仁志	制御・システム工学
		教授	田邊　裕貴	材料強度学，破壊力学，表面改質，非破壊検査
		准教授	山野　光裕	ロボット工学、メカトロニクス、機械制御
		准教授	橋本　宣慶	生産加工学、人間工学、人工現実感
		准教授	河崎　澄	エネルギーと動力、燃焼工学、内燃機関
		准教授	安田　孝宏	流体工学、流体騒音
		准教授	大浦　靖典	機械ダイナミクス、振動工学
		准教授	和泉　遊以	材料強度学、破壊力学、非破壊検査
		講師	西岡　靖貴	アクチュエータ、ソフトロボット、空気圧システム、看護工学
		講師	田中　昂	機械力学、振動工学、構造ヘルスモニタリング
		講師	出島　一仁	熱工学、伝熱工学、MEMS
	電子システム工学科	教授	栁澤　淳一	デバイス工学、半導体プロセス工学、イオンビーム工学
		教授	岸根　桂路	集積システム、アナログ・デジタル融合集積回路
		准教授	一宮　正義	デバイス工学、光物性、超高速分光
		准教授	土谷　亮	集積回路、アナログＲＦ回路、低消費電力技術
		講師	井上　敏之	集積回路、無線通信、光ファイバ無線
		講師	番　　貴彦	半導体デバイス、記憶素子、ナノ粒子、２次元材料
		教授	乾　　義尚	パワーエレクトロニクス、電力工学、エネルギー変換、燃料電池
		教授	作田　健	センシング工学、磁気計測、磁気センシング応用
		准教授	坂本　眞一	熱音響工学、超音波エレクトロニクス
		准教授	小林　成貴	走査型プローブ顕微鏡、表面・界面科学、ナノ顕微技術、ナノ構造科学
		講師	平山　智士	電磁流体力学、プラズマ工学
		教授	酒井　道	メタマテリアル科学、プラズマ理工学
		教授	砂山　渡	データマイニング、知能情報工学、教育工学
		准教授	宮城　茂幸	ディジタル信号処理、画像処理、時系列解析
		准教授	服部　峻	ウェブ知能、時空間データベース、ゲーム情報学
		講師	榎本　洸一郎	画像工学、システム情報科学、農林水産業、実応用
	ガラス工学研究センター	准教授	山田　明寛　（兼務）	無機材料

研究者別　研究分野・キーワード一覧

学部学科等		職名	氏名	研究分野・キーワード
人間文化学部	地域文化学科	教授	市川　秀之	日本民俗学
		教授	亀井　若菜	日本美術史
		教授	京樂　真帆子	平安京、都市社会史、女性史
		教授	東　　幸代	日本近世史
		教授	佐藤　亜聖	考古学、文化財科学、歴史学
		教授	塚本　礼仁	人文地理学
		教授	石川　慎治	保存修景、建築史
		准教授	萩原　和	景観まちづくり、都市農村における地域計画
		准教授	横田　祥子	社会人類学、宗教人類学、地域研究
		准教授	櫻井　悟史	歴史社会学、文化社会学、犯罪社会学、日本近現代史
		准教授	金　　宇大	世界遺産学、アジア考古学
		講師	木村　可奈子	東アジア国際関係史
		講師	高木　純一	日本中世史、村落史
	生活デザイン学科	教授	宮本　雅子	住宅照明、色彩、インテリア計画、福祉住環境
		教授	印南　比呂志	地域デザイン、道具デザイン、伝統産業、　ブランディング、地場産業論、伝統工芸、職人研究
		教授	森下　あおい	服飾デザイン、家政・生活学一般
		教授	藤木　庸介	建築計画、伝統的居住文化の維持・保全、自律的観光
		准教授	横田　尚美	服飾文化史、西洋服装史、日本洋装史
		准教授	山田　歩	行動経済学、ナッジ、消費者心理学、マーケティング
		講師	佐々木　一泰	空間デザイン、建築デザイン、構法研究、建築史・意匠、　家政・生活学一般
		講師	徐　　慧	視覚伝達デザイン、グラフィックデザイン、イラストレーション
	生活栄養学科	教授	矢野　仁康	病態栄養学、細胞生物学
		教授	中井　直也	運動栄養学、運動生理学、細胞生物学、筋サテライト細胞、エネルギー代謝、タンパク質合成
		教授	辰巳　佐和子	臨床栄養学、腎臓内科学、骨代謝学
		教授	福渡　努	栄養神経科学、栄養生理学、栄養生化学、ビタミン学食品機能学、食品、栄養、代謝
		准教授	奥村　万寿美	臨床栄養学、栄養食事指導、食育、栄養教育、給食経営管理
		准教授	佐野　光枝	食品学、栄養生化学，分子栄養学、代謝栄養学
		准教授	遠藤　弘史	病態栄養学、分子細胞生物学
		准教授	今井　絵理	公衆栄養学、栄養疫学、応用栄養学、食生活学
		准教授	東田　一彦	運動生理・生化学、スポーツ栄養学
		准教授	桑原　頌治	栄養学、臨床栄養学、腎臓内科学
		講師	安澤　俊紀	栄養学、病態生理学、臨床栄養学
		講師	畑山　翔	基礎栄養学
		講師	田中　大也	病態栄養学、分子細胞生物学
	人間関係学科	教授	高梨　克也	コミュニケーション科学、身体動作学
		教授	松嶋　秀明	臨床心理学
		教授	上野　有理	発達心理学、比較認知科学、霊長類学
		教授	丸山　真央	地域社会学、都市社会学
		准教授	大野　光明	歴史社会学、社会運動論、社会運動史、沖縄、軍事化、「戦後」史
		准教授	杉浦　由香里	教育学、教育史
		准教授	原　　未来	若者支援、ひきこもり、青年期教育
		講師	中村　好孝	社会学（社会学史、障害者福祉）
		講師	谷口　友梨	社会心理学、実験心理学
	国際コミュニケーション学科	教授	棚瀬　慈郎	文化人類学、チベット学、チベット地域研究
		教授	呉　　凌非	言語学、言語処理、中国語教育
		教授	ジョン　リピー	英語
		教授	ボルジギン　ブレンサイン	社会史、現代中国研究、モンゴル研究
		教授	吉田　悦子	言語学、談話分析、語用論
		准教授	山本　薫	英文学・英国小説
		准教授	吉村　淳一	ドイツ語学
		准教授	河　　かおる	朝鮮近代史
		准教授	マーティン　ホークス	留学英語対策講座
		准教授	中谷　博美	認知言語学、語用論、英語教育
		講師	カブシク　アントニア	カルチュラル・スタディーズ、　ジェンダー スタディーズ、英語学
		講師	間　　永次郎	社会思想史、南アジア地域研究、ポストコロニアル論、宗教学

研究者別　研究分野・キーワード一覧

学部学科等		職名	氏名	研究分野・キーワード
人間看護学部	人間看護学科	教授	伊丹　君和	基礎看護技術、教育工学
		教授	越山　雅文	産婦人科学、母性看護・助産、女性の健康・周産期ケア、浮腫診断・治療、子宮頸がんの診断・予防
		教授	本田　可奈子	救急看護、看護教育、看護管理
		教授	坪井　宏仁	心身医学、精神神経免疫学、国際保健
		准教授	米田　照美	基礎看護学、看護管理学、医療安全教育、危険認知、視線計測、看護者（看護学生・看護師）
		講師	関　　恵子	基礎看護学
		講師	千田　美紀子	基礎看護学
		教授	千葉　陽子	助産学、母性看護学、生涯発達看護学、マタニティケアシステム
		教授	古株　ひろみ	臨床看護学、小児看護学、家族看護学
		准教授	板谷　裕美	母性看護学、助産学、母乳育児、助産ケア
		准教授	川端　智子	小児看護，子どもと喫煙、未成年の喫煙防止教育、医療安全教育
		准教授	古川　洋子	地域看護学、母性看護学、助産学、いのちの教育、産み育て支援、社会的養護
		講師	子安　恵子	母性看護学、助産学
		講師	玉川　あゆみ	地域看護学、小児看護学、発達障害児の外来受診、家族支援
		講師	渡邊　友美子	母性看護学、助産学、生涯発達看護学
		助手	濱野　裕華	母性看護学、助産学
		教授	糸島　陽子	エンドオブライフケア、成人看護学、生命倫理
		教授	岡本　紀子	老年看護学、感染予防
		教授	横井　和美	臨床看護学、基礎看護学、慢性期の看護、看護管理
		准教授	荒川　千登世	臨床看護学、成人看護学、急性期ケア、回復期ケア、看護教育
		講師	生田　寡里	臨床看護学、クリティカルケア看護、成人看護学
		講師	岡﨑　瑞生	看護学、老年看護学、生活の質
		講師	小野　あゆみ	成人看護学、慢性期ケア、肝疾患患者の看護
		講師	片山　将宏	成人看護学、慢性疾患看護、脳血管障害、外来看護
		講師	喜多下　真里	成人看護学、がん看護、緩和ケア
		講師	中川　美和	成人看護学、慢性期ケア、糖尿病患者の看護
		講師	松井　宏樹	老年看護学
		教授	甘佐　京子	生涯発達看護学、精神看護学、家族看護学、学校精神保健、家族支援、早期介入
		教授	新井　香奈子	在宅看護学
		教授	牧野　耕次	精神看護学、かかわり、巻き込まれ、インボルブメント
		准教授	小林　孝子	公衆衛生看護学
		准教授	馬場　文	公衆衛生看護学,児童虐待防止対策
		准教授	森本　安紀	在宅看護学、民俗学
		講師	川口　恭子	公衆衛生看護学、保健師活動、ひきこもり、家族支援
		講師	下通　友美	精神看護学
		講師	横山　詞果	在宅看護学、高齢者ケア、国際看護
		講師	國丸　周平	在宅看護学、成人看護学、意思決定支援
全学共通教育推進機構		准教授	坂本　輝世	外国語教育論、ライティング教育
		講師	サンフォ　ジャンパティスト	教育開発、教育品質
		講師	真島　アマンダ	英語教授法、応用言語学
		講師	近藤　佑樹	アメリカ文学、アメリカ文化
地域共生センター		教授	鵜飼　修	都市計画・建築計画、地域研究、地域計画、地域活性化、環境共生まちづくり、コミュニティ・ビジネス
		講師	上田　洋平	地域学、地域文化学
地域ひと・モノ・未来情報研究センター		准教授	杉山　裕介	偏微分方程式

※詳しい研究者情報は、ホームページ（http://db.spins.usp.ac.jp/）をご覧ください。

受付年月日	年　月　日
受付番号	―

技術相談ニーズ調査票

滋賀県立大学

相談を希望する学部（希望がありましたら〇で囲んでください）		・環境科学部　・工学部　・人間文化学部　・人間看護学部
申込者	貴社名	＊パンフレット等貴社の事業内容がわかるものがありましたら添付してください。
	部署・役職	
	担当者氏名	
	連絡先	住所　〒
		TEL　―　―　FAX　―　―
		E-mail
		URL
相談事項	相談の目的（〇をつけてください）	1. 製品を改良したい　2. 製品、製造における技術上のトラブルを解消したい　3. 新技術・新製品を開発したい　4. 機械・装置を改良したい　5. 新しい技術を身につけたい 6. 新技術に関する情報・資料がほしい　7. 製品の機能や性質を調べたい 8. その他（　　）
	相談内容 ※できるだけ具体的に記入してください。お手元に相談内容を記載したものがありましたら、コピーを提出いただくだけで記入は不要です。	
	相談内容キーワード	①　②　③
	相談分野（〇をつけてください）	1. 農林　2. 食品　3. バイオ　4. 物質・エネルギー　5. 機械・制御・輸送 6. 金属材料・機能性物質　7. 建築　8. 生活・環境　9. 介護・看護関連 10. 情報関連　11. 分析・計測技術　12. メカトロニクス 13. その他（　　）
	希望する形態（〇をつけてください）	1. 専門知識・技術の提供　2. 分析・試験の依頼　3. 技術コンサルティング　4. 共同研究 5. 特許・ノウハウのライセンス　6. その他（　　）
面談を希望する教官（ありましたら記入ください）		学部　学科 氏名
相談紹介者	所属名	TEL　―　―　FAX　―　―
		役職　氏名

技術相談受付窓口　公立大学法人滋賀県立大学　産学連携センター
TEL：0749－28－8604／8610
FAX：0749－28－8620

交通アクセス

● JR南彦根駅まで

JR京都駅から普通で60分

JR名古屋駅から快速で80分
（米原駅で乗り継ぎ）

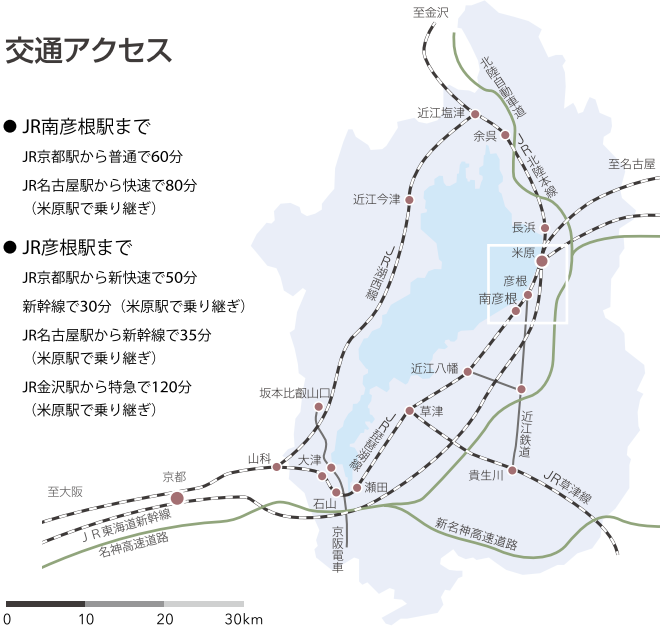
● JR彦根駅まで

JR京都駅から新快速で50分

新幹線で30分（米原駅で乗り継ぎ）

JR名古屋駅から新幹線で35分
（米原駅で乗り継ぎ）

JR金沢駅から特急で120分
（米原駅で乗り継ぎ）



大学周辺マップ

● JR南彦根駅から大学まで

バスで15分（南彦根駅西口：南彦根県立大学線）

タクシーで10分

● JR彦根駅から大学まで

バスで25分（彦根駅：三津屋線）

タクシーで15分

● 名神彦根ICから大学まで

車で20分（6.5km）

大学構内図

公立大学法人滋賀県立大学 産学連携センター

〒522-8533
滋賀県彦根市八坂町2500
TEL：0749-28-8610　FAX：0749-28-8620
E-mail：sangaku@office.usp.ac.jp
ホームページ：https://www.usp.ac.jp/chiikisangaku/center/